

に訪れた福島県双葉町は、大きく様変わりしていた。工事中だった役場新庁舎は、木のファサードが印象的な建物に完成。真新しい庁舎内では職員が忙しく働き、赤ちゃん連れの来庁者なども見られる。

駅前ロータリーではシヤトルバスが訪れる人を出迎え、花壇では女性が春に向けてバラ苗の世話をしている。

駅の反対側に回ると、真新しい家々が並ぶ住宅地が広がる。温もりのある木を生かした低層住宅の軒先には洗濯物や草花のプランター、家の前で話し込む女性の姿も。およそ11年半も無人だった双葉町は、人の営みと温もりのあるまちへと生まれ変わっていた。

○無人だった地にまちを再生

2011年の東京電力福島第一原子力発電所の事故のあと、町の全域

興推進課の皆さんが見に来てくださり、現地を確認する様子を見たときは胸が熱くなりました」

双葉町の守谷さんは「我々はまちづくりに関する経験もなく、専門知識のあるURさんのサポートなくしては、鉦入れから短期間でここまでこぎ着けませんでした。普段生活しているとはわからない基盤や電気、下水道などの下支えを全部担っていたら、縁の下の力持ちだと痛感しています」と話す。

○人の暮らしと集いを取り戻す

URは基盤整備などのハード面だけでなく、にぎわいやコミュニティづくりなどのソフト支援も行っている。担当するURの五木田隼人は話す。「人がいないと何も起こらない」と『何も起こらないから人が来ない』というのは、まさに鶏と卵の関係。これをどうに



阿部民子 text by Tamiko Abe
Illustration by Shigeyuki Sakata

種から新芽、双葉へと人が住み、集うまちに、春よ再び

福島県双葉町 双葉駅西側地区
福島復興再生拠点整備事業
2018年●平成30年～

に避難指示が出され、全住民の避難が続いてきた双葉町。2020年には、駅や復興産業拠点など一部の避難指示が解除。そして2022年8月30日。ようやく居住を可能とする「特定復興再生拠点区域」全域の避難指示が解除となった。9月5日には、双葉町役場が新庁舎での業務を開始。10月1日には災害公営住宅と再生賃貸住宅「駅西住宅」の入居がスタート。町民の新生活が始まった。

双葉町復興推進課の守谷信雄復興推進係長に、現在の状況を聞いた。「第一期25戸のうち、現在は17戸に21人の方がお住まいになっています。当初は町民の方が多いと予想していたのですが、産業拠点で働く方のか

かして壊さなければ、と始めたのが『ちいさな一歩プロジェクト』です。既存の空地や空き家を利用して小さな取組を続けることで、『双葉が動き出した』『なんか面白そう』と関わってくれるプレイヤーを増やし、まちを活性化していければと考えました」

避難指示解除直後の9月から今まで、4回のイベントを開催。除染解体で変わりゆく双葉の町と訪れた人を写真に収めたり、参加者同士で交流しながらベンチ等を作ったり、空き店舗の活用による賑わいづくりの意見交換会を開くなどして、着実に参加人数を増やしている。

同時進行で支援しているのが、双葉町のシンボルの存在である洋館の利活用プロジェクトだ。大正時代に建てられた登録有形文化財の洋館を町民の方や双葉町を訪れた方への情報発信や交流施設

か、技術支援などでまちの復興の力になりたいという町外の方も多く、背中を押される思いですね」

UR都市機構は、2017年に双葉町と復興まちづくりに関する協力協定を締結。中野地区の復興産業拠点の基盤整備や産業交流センターの整備支援に続き、双葉町役場新庁舎の整備支援、現在は双葉駅西側地区の基盤整備など、生活を営むうえで欠かせないインフラ整備などを支援している。

担当するURの滝澤善史は入社2年目。東日本大震災に際し、被災地の支援をしたい、とURに入社したという。

「基盤整備工事を行いながら、福島県が代行する駅西住宅の建築工事、電気・通信事業者が行う電線地中化工事など、同時に進行する複数の工事を入居開始に間に合うように調整しました。今回は10月1日の入居に合わせて前日ギリギリまで工事が続き、間に合ったときには施工会社などと皆で喜びを分かち合いました。入居開始前日の17時に道路などを供用開始した際は、いち早く双葉町復

としてリノベーションするもので、URは関係各所との調整や実現に向けての具体的な支援を担当。町を訪れる人の心の拠り所となる場所に、と奔走している。

「継続が何より大事。必要だから行動している、という真摯な姿勢を伝えながら取り組んでいきたい」と五木田が話せば、滝澤も「町の中心に駅があり、少し歩けば自然豊かな海や山があり、人も温かい。双葉町は本当に魅力的な町。前を向いて進む双葉町の方々に寄り添いながら、『戻ってきてよかった』と思っていただけじゃなく、お手伝いをしていきたい」と言葉を継ぐ。



双葉駅の西側には住宅が立ち並び、人の息遣いを感じることが出来る。